

令和5年度 江戸川区立平井小学校 学校関係者評価 最終評価報告書

学校教育目標	やりぬく平井の子 ・やりぬく心 ・やりぬく体	目指す学校像 目指す児童像 目指す教師像	健やかな体、豊かな心を育てる学校 かしこく、優しく、元気な子 向上心を持ち、互いに切磋琢磨する教師
前年度までの学校経営上の成果と課題	<成果> 子供たちが自ら課題を見出し、解決の課程で仲間と共に試行錯誤しながら自己の学習を調整し粘り強く取り組む学びを全教科・領域で実現を図った。 <課題> 自他の良さを認め、すすんで学びに向かう学習集団を目指し、次の学びにつなげていこうと自己調整を行えるように振り返りの場を大切に指導していく。		

教育委員会重点課題	<取組項目>・評価の視点	具体的な取組	数値目標	自己評価		学校関係者評価	年度末に向けた改善策
				取組	成果		
学力の向上	<学力の向上> ・授業改善の推進、学習の基盤となる基礎・基本の確実な習得、家庭学習習慣に対する学校の組織的な対応による取組の実施・充実	①「誰一人取り残さない学力向上アクションプラン」の実施・改善 ②一人一台端末を活用した個別最適な学びの実現 ③学力向上のための補習の充実 ④小学校における教科担任制の導入 ⑤「江戸川っ子study week」の実施 ⑥ 東京ベーシック・ドリルの活用	①学力調査百分位の各層の向上(C層、D層2) ②国語の進捗率と読解力(月1回) ミラーの活用(週1回以上) ③外部委託先15回実施 ④外部委託による補習授業の開催 学年担任による層別授業の徹底(支援)3.5、6年で実施 ⑤3年級教員の単元1年進捗(学期別達成率) ⑥家庭学習「ミラー」(9月16日)活用(年度末) ⑦継続率向上、結果の分析と正答率5割以下の課題のある単元の正答率向上 ⑧「主体的な学び」に関わる児童意識調査について数値向上(年間2回実施)	A	B	・東京ベーシックドリル診断テスト結果を受けて、苦手な単元などを把握し、復習に取り組んでいくことが分かった。 ・ICT機器(タブレット)の活用率は、学年の発達段階で異なってくるが、1人一台端末を活用した学習に取り組もうとしている様子が伝わってきた。 ・児童意識調査の結果を見ると、学習に向かう姿勢が、主体的になっていると感じられる。	①全体的にD層2、C層5%以上で結果であった。学年の実態に応じた対応を継続していく。 ②ICT機器の連携で、児童の理解の解消ができた。 ③継続的な実施ができた。D層への指導時間の確保が今後の課題である。短時間で取り組むための工夫が必要。 ④5・6年生以外でも、各学期1回程度なら実施可能であった。教材作成の時間短縮や児童意識調査が効果的であった。 ⑤短時間で取り組む方が、児童の負担感が少なかった。 ⑥若手教員は、図形・資料上の読み取りとデータの活用であった。繰り返し指導を行う。
	<読書科の更なる充実> ・読書を通じた探究的な学習の実施・充実	①読書科(教育課程特例校)の実施 ②探究的な学習の計画的実施と補助資料の工夫 ③公共図書館との連携強化 公立図書館司書の巡回 ④研修の充実 職歴、ニーズに応じた研修の実施 ⑤ 読書科の自校及び保護者、学校関係者による評価の実施、分析、公表	①読書科ノート(全学年活用、朝読書) 読書科を活用した、調べ・表現する学習の実践 計画的な保護者の読み聞かせの実施 (各学期1回以上実施) ②探究的な学習の実施(各学年・年2単元以上) ③公立図書館の巡回による読書活動(低学年) ・専門家による、読み聞かせ ④研修の実施(職員会議、夕会の活用) ⑤学校公開による読書公開講座(各学年1回実施) ⑥「読書科」に関わる児童意識調査(年間2回実施) ⑦「本を読むことが好き」「調べたことや考えたことを発表することが好き」についての数値向上	A	B	・各学年で、年間1度は学校公開の場で読書科の学習に取り組む様子を公開したことで、読書科がどのように取り組まれているのかが見えてきた。 ・地域に解放されるようになったことで、より本に触れる機会が増えたとともに、インターネット検索だけでなく、本にもじっくり向き合わせる活動を継続してほしい。	①図書室がサテライトとなり、司書の方が来校する機会が増えたことで、図書室の充実が図れた。探したい本が見つかりやすくなり、調べ学習にも図書室の本を活用することができた。 ②団体貸し出しを活用し、本に触れる機会を増やせた。 ③指導主事による読書科相談会を実施することで、学年ごと充実したアプローチができた。今後も講師を活用し、読書科の授業の充実を図りたい。 ④どのような学習活動を行っているかを学校HPを活用して知らせていくようにする。
体力の向上	<運動意欲や基礎体力の向上>	①休み時間を活用した「運動遊び」の全校実施 ②ジョギング週間(2学期2週間程度)、なわとび週間(3学期2週間程度)の実施 ③運動遊びに関わる児童意識調査(年間2回実施)	①「ゆゆうタイム」の工夫・改善・継続(週1回、15分程度実施) ②ジョギング週間(2学期2週間程度)、なわとび週間(3学期2週間程度)の実施 ③運動遊びに関わる児童意識調査(年間2回実施) ④「ゆゆうタイムが楽しい」「休み時間に毎回体を動かしている」について数値向上(5%以上)	A	A	・学校HPに掲載されている児童意識調査の結果からも、子供たちの体向上のための取り組みが、運動をすることが楽しいと感じることに繋がってきているのを感じた。 ・他学年との交流も視野に取り組みしている様子がとてもよいと感じる。他者意識をもって一緒に楽しみながら運動をしてもらいたい。	①運動遊びに関わる児童意識調査については、ゆゆうタイムが楽しく肯定的に回答する児童の割合が88.7%であった。休み時間に関心をもち児童の割合は減少していった。担任が中心となって声を掛け、一緒に体を動かすことにも取り組んでいく。 ②なわとびやジョギング週間意欲的に取り組む児童の姿が見られた。次年度、どのように継続していくかは検討が必要。
	<特別支援教育の推進> ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた個に応じた指導の実施・充実 ・エンカレッジルームの活用促進 ・副籍交流、交友及び共同学習の実施・充実	①「学校2020レガシー」の設定 ② 共生社会を実現する支援シートの充実 ③ 副籍交流、交友及び共同学習の充実 ④ エンカレッジルームの活用促進	①経営推進部で(ボラティア・マインド、誰がいて理解、豊かに理解)を設定 ②支援シート作成 ・連携型別指導計画の内容改善(学期1回) ③副籍交流の実施(継続・内容の検討) ④「保護者・児童」に関するアンケートを実施 ⑤「学校2020」に関わる児童意識調査(年間2回実施) ⑥「友達と協力したり、働くことができる」「エンカレッジルームの目的を知っている」について数値向上	A	B	・校内での情報共有を行うことで、教職員と児童、保護者のつながりができていることが分かった。 ・エンカレッジルームを効果的に使用することで、改善されている児童数が増えていること、今後も、一人一人を大切に目撃しているような学校であってほしい。	①平井リミナルや障害者コミュニケーション理解促進出前授業を活用し、3～6年生まで障害者理解の対象学年を拡大できた。 ②支援シートについては、巡回指導教員と連携を行いながら改善を図る。 ③1・5年生で年間数回の交流活動を実施。次年度も継続して取り組んでいく。 ④エンカレッジルーム自体の利用者数は少ない。しかし、特別支援教室との調整や、不登校児童の支援体制に課題がある。
子どもたちの健全育成	<子どもたちの健全育成に向けた取組> ・不登校対策の実施・充実 ・教育相談の強化 ・hyper-QUの活用	①江戸川区子ども権利条例の理解 ②Hyper「Q-U」の実施(年2回) ③スクールソーシャルワーカーの派遣 ④生活指導連絡協議会の実施 ⑤地域・PTAと連携した教育活動の充実	①タブレットを活用しての学習(5月) 全校集会での講話実施 ②問題の早期発見・解決、個別対応 ③問題を抱えた児童を把握するシートの作成・活用 ④スクールソーシャルワーカーの定期的活用、情報交換を行うことのできた。学校と家庭とのつながり強化 ⑤生活指導連絡協議会に生活指導主任が出席し、他校情報交換を行い、他校の取組について校内伝達を実施した。 ⑥「平井小児童まつり」の実施とPTAによる「平井まつり」の教員参加 6回以上 ⑦「インターネット」キッズ将来に関する児童意識調査(年間2回実施) ⑧「使い方を守っている」「将来の夢や希望があるか等」の数値向上	B	B	・Hyper「Q-U」(学級満足度調査)を行うことで、教職員が子供たちとどのように接していくべきなのかを考えるきっかけになっていることが分かった。 ・外部機関との連携は重要なことである。今後も協力して対応していく。 ・携帯電話を所持している人数が年々増加していることに驚きを感じる。	①子ども権利については、講話や授業だけでは理解ができていない部分がある。継続して指導を行っていく。 ②Hyper「Q-U」(学級満足度調査)を実施することで、早期対応に繋がることができた。より効果的な活用方法について講師を招いて研修を行っていく。 ③個別の支援について助言もいただけたが、全体で共有できていない部分がある。SSWを講師とした研修を検討していく。 ④生活指導連絡協議会の情報を伝達し、共有することができた。 ⑤子供、保護者、教員、地域の交流の場となった。
	<自校(園)の取組の積極的な発信> ・学校(園)ホームページの充実等 ・学校(園)公開の実施・充実	①学校HPの充実・校内取組の積極的な発信 ②学校(園)ホームページの充実等 ③計画的な教科の割り振り 学校公開(年4回)	①日常生活(各学年4回) 行事ごと更新 ②算数習熟度別学習、専科の授業公開(各回学年に応じて)	①日常生活(各学年4回) 行事ごと更新 ②算数習熟度別学習、専科の授業公開(各回学年に応じて)	B	B	・学校公開で、様々な取り組みの様子を見ることができた。今後も、学校公開やHPにも活用し、学校の取り組みの様子を広めていってほしい。
地域に広く開かれた学校(園)の実現	<学校関係者評価の充実> ・教育活動の改善・充実に向けた学校関係者評価の実施	①全校統一した重点項目による評価の実施 ②学校(園)の分析、公表 ③学校関係者(教員・保護者・学校評議員会)の評価	①学校評議員会年間3回実施 教員・保護者による年度末評価 12月実施	A	A	・学校評議員会場の場を設定し、報告を聞くことで、教職員が協力して取り組んでいることがより伝わってきた。 ・今後、情報共有を行いながら、教育活動の改善を図ってほしい。	・児童、保護者、学校評議員会からの学校評価、教員から行事ごとの反省を活用し、年度内に改善策を作成し、来年度に確実に実行していく。
	「学校における働き方改革プラン」に基づく取組の実施	①SSS、SS、SSWの積極的導入 ②学校経営支援を担う人材の導入(副校長補佐) ③学校法律相談 スクールロイヤーの活用 ④学生ボランティアの活用	①教員の授業以外の時間の確保(各学年週1時間以上) ②活用の工夫 ③必要に応じて活用 ④担任の補助(週1日) ⑤勤務事故ゼロの達成	A	B	・ワークライフバランスを意識した働き方を行っていることで、勤務事故0件に繋がっているのを感じた。 ・優先順位をつけ、解決すべきことを精選して取り組んでもらいたい。	①時間外勤務について、一人あたりの平均時間は、昨年度と比べ、約1時間減少した。印刷、掲示、教材作成など、SSSへの業務移行が成果として現れている。 ②外部支援人材の業務の幅を広げ、作業時間を提示するなどして、より効率的な活用を図る。 ③常に相談する体制を整え、問題が生じた際には早急に相談する。 ④協会にも強く要請したが、人材を見つけることは難しかった。